

VI 高機能自閉症とは

高機能自閉症を理解するためには、まず自閉症を理解する必要があります。

1 自閉症の診断基準と原因

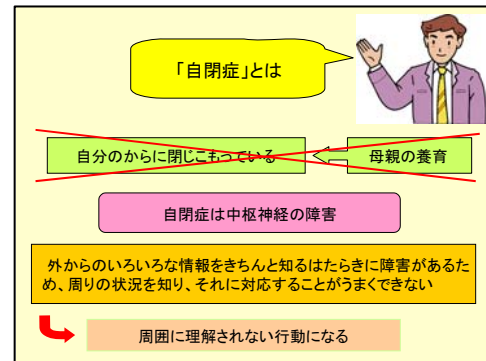
自閉症の診断では、次の3点が基準となっています。

- ・ 相互的な人との交流が困難
視線が合わない、感情表現が難しい、
集団行動がとりにくい言語を中心とした
コミュニケーションの障害
- ・ 興味や行動の幅が狭く、こだわりがみ
られる

自閉症は中枢神経の障害です。心理的な原因や環境的な要因によるものではありません。

目や耳などの感覚器官に問題はありませんが、そこから脳内に入ってくる情報を処理する過程に課題があります。そのため、一般の人とは違った感じ方（認知）をしていると思われます。

また、知的発達の面で遅れのある子どもが多くいます。

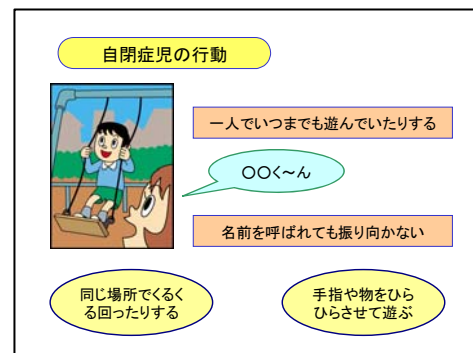


2 自閉症の行動

自閉症は認知の発達に大きな偏りがあります。そのため、学習面や行動面に大きな困難が生じます。

たとえば名前を呼ばれても反応しなかったり、いつまでも一人で遊んでいたりするなど、コミュニケーションに課題がある場合や、変化がきらいで時間や場所、順序や物、日程などへのこだわりがあることなどがあります。

また、偏食がある子どもも多くいます。牛乳や野菜、魚などを食べられないことがあります。

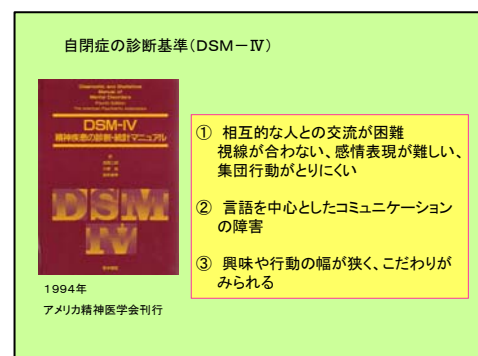


3 高機能自閉症とは

(1) 高機能自閉症

自閉症の診断基準がみられ、知的発達の遅れをともしないものを高機能自閉症といいます。

この場合の「高機能」という表現は、必ずしも知的能力が平均よりも高いということの意味しているわけではありません。「明らかな知的発達の遅れがない」という意味で使われています。



したがって、「高機能」といっても知的能力が境界域の人から非常に高い人までいます。

(2) アスペルガー症候群

知的発達の遅れを伴わず、かつ、自閉症の特徴のうち言葉の発達の遅れを伴わないものをアスペルガー症候群といいます。なお、高機能自閉症やアスペルガー症候群は、広汎性発達障害（Pervasive Developmental Disorders・・・PDDと略称）に分類されます。

4 高機能自閉症の症状

(1) 社会性の欠如

他者との交流がスムーズにいかない状態がありますが、高機能の場合は慣れ親しんだ環境では、社会性の欠如が目立たないことがあります。この子どもたちを理解するためには、友だちとの遊びの場面などを詳細に観察することや、発達の過程を知ることが必要です

(2) コミュニケーションの障害

高機能の子どもたちはことばがないということはありません。しかし、その使い方が問題となっています。

覚えたことばを相手や場所、時間などに応じて調節していくことに課題があります。また、ことばの意味を深くとらえることができにくく、字義のみの意味理解にとどまることがあります。

また、相手の表情や身振りなどの非言語的な要素の理解が難しく、ことば以外の表現をコミュニケーションの手段とすることがあまりありません。

これらのために相手の気持ちを傷つけることがわからずに、いやがるようなことばを発してトラブルとなることがあります。また、恥ずかしさがわからないこともあります。

(3) 想像力の不足

物を何かにみたてることや現実の経験に想像力を働かせて、アレンジすることが苦手です。

想像力が働きにくいいため遊びなどのレパートリーや方法がかぎられてしまい、同一性を保持しようとするためにこだわり行動があらわれます。

感じ方に一貫性がない



- ・耳が聞こえない、ことばや音に反応しないようにみえることがある。
- ・掃除機の音や犬の吠える声などをいやがることもある。
- ・暑さ、寒さなどに敏感であったり、逆に感じなかったりする。

「聴覚過敏」や「触覚過敏」など、「感覚過敏」のある子どもがかなりの数存在する

運動会などで、ピストルの音をいやがる場合がある。

(4) 感覚異常

視覚、聴覚、味覚、臭覚、皮膚感覚

の全ての感覚に過敏さ、あるいは鈍感さがみられることがあります。

視覚が過敏なため、目に入った文字を読んでしまったり、聴覚が過敏なために犬の吠える声や運動会のピストルの音を怖がったりします。

また、皮膚感覚が鈍感なために暑さや寒さをあまり感じないこともあります。

味覚の過敏さは極端な偏食というようなものとしてあらわれる場合があります。

(5) 運動のぎこちなさ

歩き方や走り方がぎくしゃくしている、運動競技が苦手、字が上手に書けないなどとしてあらわれます。

ストレスのたまった状態や緊張している状態のときに、体を前後にゆすることやその場で飛び上がったることがあらわれることがあります。

高機能自閉症の子どもたちへの支援は、どのように行えばよいでしょうか

1 学習指導

(1) 授業態度

高機能自閉症の子どもは、知的能力の偏りやこだわりから、時間を忘れるほど取り組む教科もあれば、全く興味を示さずに取り組まない教科もあるといわれています。

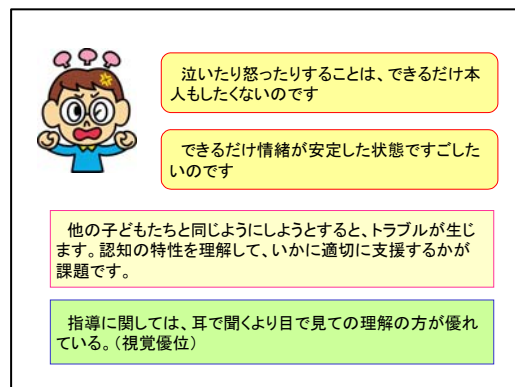
まずは、集団の中にいることができるようになることを目標にして取り組みます。

次に、学習をすすめるにあたっては、何時何分まで行う、教科書の何ページまですすめるなど、本人に見通しが持てるように配慮します。

自閉症は、いろいろな情報は耳で聞くことよりも目で見ることの方が入りやすい「視覚優位」といわれています。

学習の手順や何をどこまで行うかを文字化して、提示することが効果的であると思われまます。また、絵や写真を活用することも方法としてあります。

机の位置は一番前の教師のすぐそばが、声をかけやすく余計な刺激が少なく、良いと考えられます。



(2) ことばの理解

言語発達に偏りや遅れがあるために、文章の読解や作文などを苦手とすることが多くあります。

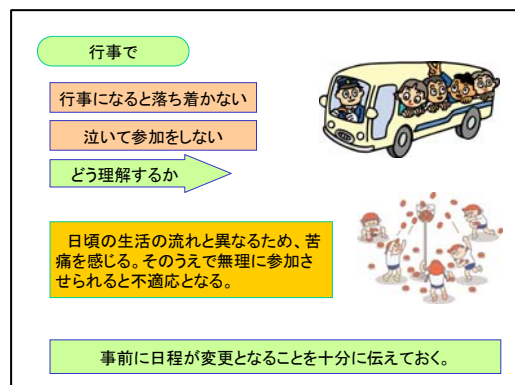
ことばかけについては「きちんとしましょう」というようなあいまいな表現を避け、具体的で見通しの持てるよう「椅子にすわりましょう」「何時何分までにこの問題に答えましょう」というような指示をします。

また、指示はゆっくりと簡潔にし、一度に複数の指示をしないようにします。複雑な指示の際は、自閉症の視覚優位という特性を考慮し、紙や黒板に書くようにします。

(3) 日程の変更

特別活動など日頃と違う生活の流れでは、日程などへのこだわりや活動の見通しがわからないことから、情緒が不安定になることがあります。また、遠足などでは初めての場所への不安があることもあります。事前にそれらへの対応を行っておく必要があります。

日程が変更になることを、カレンダーや時間割、行事の内容等を視覚情報化し、有効に活用して、事前に本人が理解できるようにします。

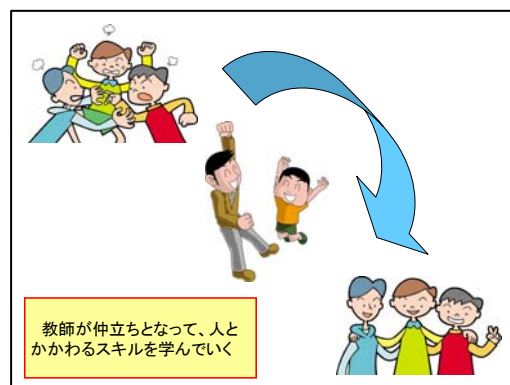


2 生活指導

(1) 友だちとの関係

高機能自閉症の子どもは、多くの子どもの中に入って協調して行動することが苦手です。そのために、遊びから外れてしまったりトラブルを起こしたりすることがあります。

教師が遊びや学習の場面で子どもたちの仲立ちとなり、活動を行い、相手を意識することや順番やルールを守るというスキルを学べるようにします。



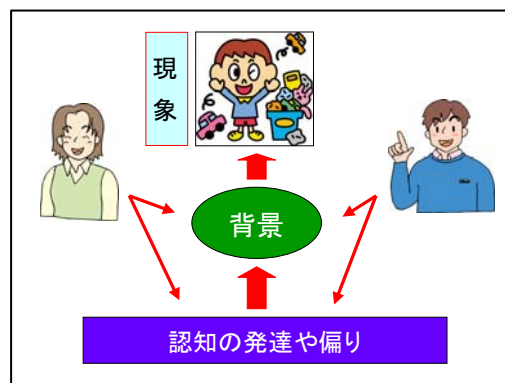
(2) 生活習慣や集団のきまり

身だしなみに無頓着であったり、行儀が悪い、社会のルールを理解して行動できないことがあります。

身だしなみに無頓着な場合は「きちんとしなさい」というようなあいまいな表現ではなく、具体的に改めることをその都度注意します。

使った道具などを片付けることができない子どももいます。次の活動に移る前に、使った道具を片付けることができたかどうか評価をすることなどで注意します。

花壇の水撒きが役割になっている子どもは、雨の日でも水撒きをしていることがあります。状況に応じてルールを柔軟に変えることが難しいためです。このような場合はロールプレイの方法で判断や対応を学びます。



高機能自閉症の子どもたちの行動は、理解しがたいものがあるかもしれません。しかし、そこには必ず背景が存在します。その部分を理解しようとしないと支援の方法は見つけにくいものです。

背景を理解するためには、子どもたちの認知の発達や偏りを把握することが不可欠です。

気になる行動や問題となる事柄の現象面のみにとらわれることなく、背景に目を向けることが大切です。

3 担任としての姿勢

学級担任一人が気になる子どものことを考えても、なかなか良い方策は浮かばないことがあります。一人で抱え込むのではなく、管理職や他の学級担任、養護教諭と連携し、多くの目で情報収集し、共通理解を図った上で方策を考えることが良いと思われます。

また、専門機関と連携をとる場合があります。その際は保護者の理解と協力が必要になります。「あなたの子どもさんは〇〇ができないから…」というようなネガティブな内容を話題にするのではなく、「子どもさんにとってより良い方法を一緒に考えましょう」という姿勢で話をすることが、理解につながるものと考えます。